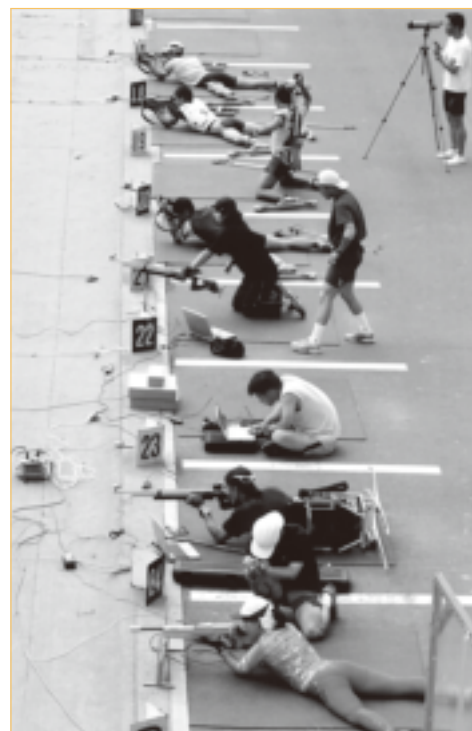


編集委員が 行く

トリノ・パラリンピックめざして「ただいま特訓中」

障害持つスキー選手をサポートする日立システム

本誌編集委員 読売新聞特別編集委員 小谷直道



株式会社日立システムアンドサービス

〒108-8250 東京都港区港南2-18-1

JR品川イーストビル

TEL 03-6718-5711 FAX 03-6718-5719

URL <http://www.hitachi-system.co.jp>



日立システム 奥村 博 執行役員専務

イタリア北部の一〇〇万都市トリノ。世界遺産に登録されているサヴォイア家の王宮群がある。一九世紀にはイタリア統一運動の拠点となり、一時期、イタリア王国の首都が置かれたこともある。

そのトリノで、来年二月に冬季オリンピックが開かれた後、三月一〇日から一九日までの一〇日間、冬季パラリンピックが開催される。

障害者のスポーツを支援する日立システムアンドサービス（本社・東京都港区港南二一八一、中村博執行役員専務。以下、日立システムと略す）。同社のスキー部員を中心としたノルディック競技の日本選抜チームの選手たちも、トリノ・パラリンピックをめざして、夏の北海道で汗びっしょりになりな



がら、合宿練習を行った。

夏場のバイアスロンはローラースキーで練習

札幌市豊平区の陸上自衛隊西岡バイアスロン射場。五〇メートルの周回コースと二・四キロの山坂のあるコースが併設されている。夏場はローラースキーを使って練習できる数少ない施設である。

トリノ・パラリンピックの日本選抜選手たちは、周回コースをローラースキーで滑り、射場に伏せて銃を発射する練習を繰り返した。

ローラースキーで周回コースを思い切り走ると、当然、呼吸は乱れ、心拍数も早くなる。その直後に射場に伏せて、素早く呼吸を整え、精神を統一して、銃口をピタリと的に向ける。

動と静——。その両方を制する者だけが勝利を手に行けるのだ。



本番では、視覚障害を持つ選手はビーム銃、ほかの障害を持つ選手はエアガン（空気銃）を使う。しかし、今回は全員ビーム銃での練習になった。実弾を使うエアガンの練習は、事前に公安委員会に届けなければならぬ。今回の合宿は直前に決まったため、手続きが間に合わなかったのだ。

このようにバイアスロンは、どこでも気軽に練習できるわけではない。選手が個人で練習できる場所を探し、その費用を負担するのは大変なことである。そうした意味でも、企業のサポートは極めて重要なのである。

企業スポーツ撤退の中パラリンピックを支援

バブル経済が終わって、多くの実業団スポーツチームが休部・廃部に追い込まれた。スポーツデザイン研究所の調査で



札幌にある陸上自衛隊西岡バイアスロン射場

は、一九九四年から一〇年間に休部・廃部に追い込まれた実業団チームは、野球、サッカー、バレーボールなど、二五九チームにのぼる。

日立システムは、企業や官庁のコンピュータ・システムを構築し、コンピュータに関連するさまざまな問題の解決に当たる会社である。企業のスポーツ支援が次々撤退するなか、同社はあえてスキー選手、それも障害を持つスキー選手を支援することにした。これは大きな決断である。

同社の支援が始まったのは、元役員でかつてはノルディックの選手だった渡部勤さん（現・スキー部顧問）が友人の娘さんの結婚式で、パラリンピックのスキー監督、荒井秀樹さんに出会ったのがきっかけだった。

この時、渡部さんは荒井さんから、パラリンピックの選手たちが障害を乗り越えるためにいかに努力をし、国際的な試合に出るためにどれほど苦労しているかを聞いた。

渡部さんは会社に持ち帰って、ほかの役員、幹部とも相談した。社員の一体感を醸成し、社会に貢献することにもなる。ぜひ応援し

ようということになり、話は実現に向けてとんとん拍子に進んだ。

日立システム執行役専務の奥村躰おくむらひことしさんは「当社は三つの会社が合併した会社で、社員の意思統一を図る目的もありました。また、企業スポーツが次々撤退するなかで、あえて障害者のスポーツを応援して、社外の方々とも感動を共有したいという思いもあって、昨年初、スキー部を創設しました」と話す。

視覚障害者の射撃は電子音の変化が頼り

パラリンピックのスキーは、回転、滑降などのアルペン競技と、ノルディック競技の二種に分けられる。オリンピックと違ってジャンプ競技はない。ノルディック競技は「雪原のマラソン」といわれるクロスカントリート、射撃を加えたバイアスロンがある。

クロスカントリートは、スキーの上に乗って滑る立位（男子は五二〇キロ、女子は五一五キロ）と、いす型のシートスキーに座って滑る座位（男子五一五キロ、女子二・五一一〇キロ）がある。

また、バイアスロンは、従来の短距離（七・五キロ）のほか、トリノ大会から新たに長距離（二二・五キロ）が加わる。いずれも二・五キロのコースをスキーで一週することに射場に入り、エアガン



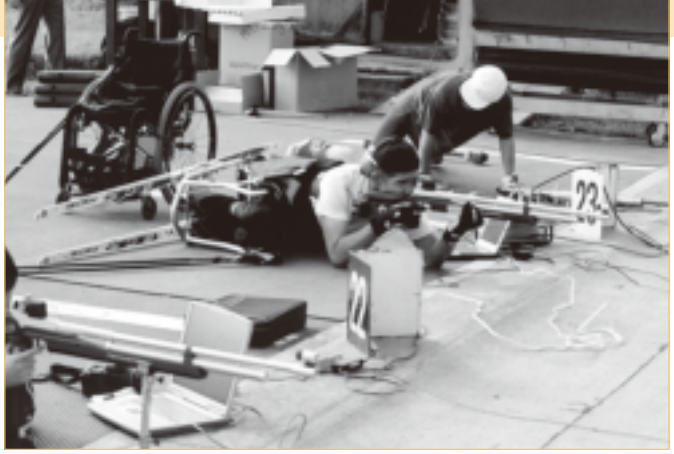
日立システムのスキー部創設にあたって、監督として招かれた荒井秀樹さん



（空気銃）で射撃を行う。一〇メートル離れた場所から一・五センチの的を狙う。五発撃ち、一発は必ずと一分のペナルティが課せられる。

視覚障害を持つ選手は、ガイド（伴走者）とともに滑り、バイアスロンの銃は電子音のするビーム銃を使う。銃口の的の中心に近づくに従って、ピーピーピーと周波数が変化し、高い音に変わる。選手たちはヘッドホンを耳に当て、この音

選手たちの指導にあたる荒井監督



車いすにスキーをつけて練習に励む長田弘幸さん

の変化を聞き分けて発射する。視覚障害者の目的は、やや大きく三センチだが、難しいことに変わりはない。

区民の体力づくりから 障害者スキー指導者へ

スキー部創設に当たって、まず監督として荒井さんが招かれた。

荒井さんは東京・江東区で深川スポーツセンター所長を長く務め、区民の体力づくりに携わっていた。しかし、同社が障害者のスキーを支援することになり、荒井さんも区役所を退職してこれを手伝うことにした。

荒井さんは北海道旭川市の出身。高校時代までスキーをやっていた、札幌オリンピックの際にはジュニアの強化選手にもなった。東京の大学に進んでスキーは中断していたが、社会人になって再開、クロスカントリーの選手として国体に出場したこともある。

長野パラリンピックの際には地元日本もぜひ選手団を出したいと、厚生省（現厚生労働省）に準備室ができた、全日本スキー連盟の役員だった荒井さんはチームづくりを依頼される。

長野パラリンピック二年



車いすの長田さん。日立システムに入社後、北海道の自宅でパソコンを使って在宅勤務をしている

前の一九九六年、全国の障害者に呼びかけ、約五〇人が集まった。しかし、冬になって実際にスキーに乗ってもらったところ、まったく経験のない人もいた。

にわかづくりのチームだったが、選手たちは本番では大健闘。長野パラリンピックはテレビや新聞で大きく報道され、障害者だけでなく、健常者にも勇気と感動を与えた。

しかし、パラリンピックが終われば、選手への支援は急激に減る。パラリンピックに出場する場合には国が援助してくれるが、そのほかの多くの国際大会に出場するには障害者自身が費用を捻出しなければならぬ。

荒井さんは「選手たちは経済面でも苦勞をしているので、会社の決断には大変感謝しています」と話している。

妻の貯金で出場した 国際大会で金メダル

続いてスキー部の選手として、ワールドカップ・カナダ大会男子シットスキー五キロで金メダルの長田弘幸さん（四二歳）が加わった。

長田さんは、北海道夕張郡栗山町の出身。二一歳の時、二輪車事故で脊髄を損傷して下半身がマヒした。一年半入院した後、岩三沢市の授産施設・緑成園に入る。ここで車いすマラソンをやっていた

が、長野パラリンピックの選手募集に応募してシットスキーを始めた。

長野パラリンピックは一〇キロで六位、二〇〇〇年のスイス世界選手権五キロで銀メダルを取ったものの、二〇〇二年のソルトレーク・パラリンピックでは五キロ、一〇キロとも五位だった。

シットスキーに接触する部分の褥瘡じよくそうに苦しみ、自分の中で完全燃焼できない不満の残る成績だった。しかし、その後、シットスキーのゴムのショック・アブソーバー（緩衝部）が日本でも格段の進歩を遂げ、長田さんは何とかもう一度チャレンジしたいと思った。

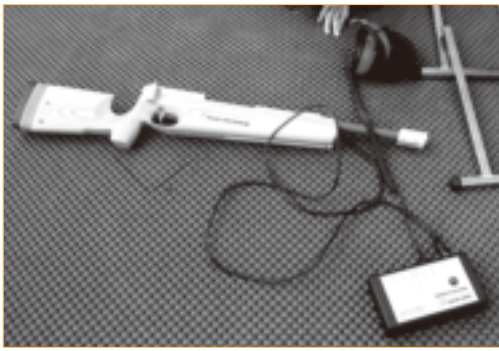
しかし、パラリンピック以外の国際大会は、自費で行くしかない。妻の愛美さんがパートで貯めた定期預金を解約して、旅費を捻出してくれて、ようやくワールドカップ・カナダ大会に行くことができた。

もう後に引けないという思いが通じたのだろう。この大会、シットスキー五キロで、ついに金メダルを獲得した。

長田さんは「荒井監督から日立システムの話を知って、国際大会の出場に苦勞していた自分としては大変ありがたい話なので、すぐに参加させていただいた」という。会社では普段はパソコンを使って在宅勤務をしているが、トリノ・パラリンピックでは「何とか結果を出したい」と話していた。



長野パラリンピック視覚障害者バイアスロンで、金メダルに輝いた小林美雪さん。トリノでの活躍が期待される



視覚障害者の小林さんが使用するビーム銃

長野のミユキ・コール トリノでも巻き起これ

スキー部には、長野パラリンピック視覚障害者バイアスロン女子七・五キロで金メダルに輝いた小林美雪さん(三一歳)も加わった。

小林さんは長野県小谷村出身。小学二、三年生のころから視力が落ち始め、松本市の盲学校、筑波技術短大鍼灸学科へと進む。卒業後、東京・中央区の特別養護老人ホームに就職し、高齢者のリハビリ・マッサージに取り組んだ。

ここで五年間勤め、長野県に帰って大町の老人保健施設で三年間働く。盲学校時代の恩師の勧めでスキーを本格的に始めた。一九九六年のジャパン・パラリンピックに初参加、役員から用具を借りてアルペンやクロスカントリーストリーに出場、手ごたえを感じた。

長野パラリンピックでは、バイアスロ



荒井監督、小林美雪さんたちに話を聞く(日立システム東京本社で)

日立システム東京本社で、ヘルスキーパーとして働く小林さん



ン女子七・五キロに出場、当時はエアガンが使われていたが、一〇発中九発を的中させ、三三分三六秒二というタイムで優勝した。会場は観客総立ちで「ミユキ、ミユキ」の大合唱、冬季大会で日本選手初の金メダルに沸いた。

しかし、次のソルトレーク・パラリンピックでは旗手を務めながら、全盲クラスに出場すべきところ、違うクラスに出たためガイドの背中もまったく見えず、最高六位と惨敗した。

トリノでは「この悔しさをバネにがんばりたい。会社に世話になってる以上、逃げ口上は許されない」と、自らを引き締めている。

会社では、普段はヘルスキーパーとして社員のマッサージに当たっているが、これまでのようにお年寄りが対象ではない。コンピュータを使う人たちの腱しゅう炎や眼精疲労についての専門知識も必要で、「毎日が勉強」という。



中村さんが銃を構える基本姿勢を触って学ぶ小林さん

国際大会で四種目入賞 将来をになう期待の星

さらに、もう一人、ワールドカップ・カナダ大会などで好成績を残した太田渉子さん(一六歳)が加わった。ただ、彼女は山形県北村山高校に在学中のため、スキー部の下部組織であるジュニアスキークラブに入るようになった。

太田さんは山形県尾花沢市の出身。小学一年生のころからスキーを始め、三年生になるとスポーツ少年団に入って、本



編集委員の素顔 小谷直道

よみうりランド代表取締役社長、読売新聞東京本社特別編集委員。新聞社では論説委員として、医療、福祉、年金など社会保障に関する社説やコラムを担当、大阪本社の編集局長を務めた。現在は遊園地などの運営に当たっている。

2007年、静岡県で、技能五輪国際大会と国際アビリンピックが史上初めて同時開催される。「2007年ユニバーサル技能五輪国際大会」。昨年からは、大会準備委員を務めているが、健常者も障害者も自立して生きていくために「技能」がいかに大切かをアピールできればと考えている。



合宿中の太田さん取材する筆者（写真右）



(上) カルガリー五輪のバイアスロン代表で、陸上自衛隊冬季戦技教育隊の中村忠広報幹部の指導を受ける太田渉子さん

(下) 左手が不自由なため、右手のストック一本でスキーを操る太田さん

格的に練習を始める。不自由な左手にストックを巻きつけて滑っていたが、うまくいかず、今は右手のストック一本で滑る方式に切り替えた。

二〇〇三年、国内の各種大会で頭角を現し、二〇〇四年、全日本障害者クロスカン トリー白馬大会フリー五キロで二位、二〇〇五年、妙高のジャパン・パラリンピックでクラシカル五キロ一位、フリー五キロ一位となった。

そして、国際大会でも二〇〇四年のワールドカップ・カナダ大会でフリー五キロ四位、一五キロ五位、スプリント四位、



社会的責任果たすため 障害者へ多様な支援を

クラシカル六位と、四種目に上位入賞を果たした。関係者から「将来、パラリンピックのノルディック競技を背負う期待の星」と、折り紙をつけられた。

小学五年生の時、スポーツ少年団まで送り迎えしてくれた母ひろみさんをガンで失う。トリノ・パラリンピックでは、お母さんのためにもメダルを狙いたるところだが、闘志はうちに秘めて「がんばります」とだけ語った。

パラリンピックは、イギリスのストークマンデビル病院で行われた障害者のス

ポーツ活動が発展したものだ。一九四八年、ロンドンで行われた車いす使用者によるアーチェリー競技が第一回ストックマンデビル競技大会である。

その後、国際パラリンピック委員会（IPC）は、一九六〇年にローマで開かれた第九回ストックマンデビル競技大会を第一回パラリンピックと位置づけた。また、冬季パラリンピックは一九七六年、スウェーデンのエーンシエルドスピックで初めて開催され、来年のトリノ大会は第九回となる。

社員の一体感の醸成、会社のイメージアップ、顧客に感動を与える——など、企業がスポーツを支援する意味はいろいろある。さらに一歩進めて障害者のスポーツを支援することは、企業の社会的責任のうえでも大きな意味がある。

アメリカでは第二次大戦後、企業も一市民として社会貢献すべきだとする企業市民（コーポレート・シチズンシップ）の考え方が定着した。日本でも最近では、企業の社会的責任（CSR）が強く求められるようになっていく。

企業ができる障害者への支援は、雇用にとどまらず、生活面の支援やアクセスの確保などさまざまある。スポーツ支援も障害者支援のひとつである。

企業が創意と工夫をこらして、さらに障害者支援に力を入れてくれることを願わずにはいられない。